

露頭の風景 写真家の視点

斉藤 麻子

山形県の北側、秋田県と接する遊佐町にある“十六羅漢岩”です。山形県を紹介するサイトで初めてこの存在を知ると、すぐさま撮影候補となりました。地質の知識の無い私にとって露頭を選ぶポイントは、人工物との織りなすコントラストや個性的な色や形や模様など、見た目によるところが多いのですが、十六羅漢岩は申し分無く、そのような条件を適えていました。撮影する際には常々、人の一生何回分もの時間を経てきたであろう露頭を目の前に、現代の社会を一体どのように見つめているのかと問いたくすることがあります。もちろん耳も目も口も持たない露頭から

返事が返ってくるわけはありません。しかし今回の十六羅漢岩は、人の姿かたちが彫られている為に露頭が顔を持っているようで、今にも返事をしてきそうな雰囲気がありました。また遊佐町と隣接する酒田市には、写真家土門拳の記念館という、写真を志す者としては訪れておきたかった場所があります。閑静で広大な公園の敷地内に瀟洒な佇まいで建つ記念館に、しばし旅の疲れも癒され、インパクトの大きかった十六羅漢岩とともに、山形の撮影旅行はとても思い出深いものとなりました。

地質屋の視点

及川 輝樹

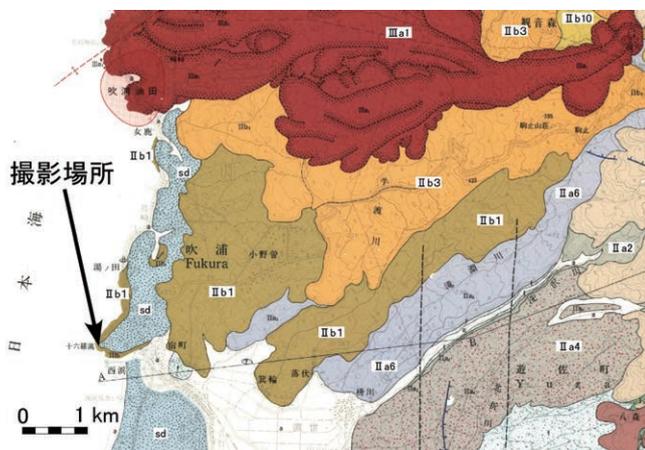
山形県飽海郡遊佐町吹浦海岸に位置する十六羅漢が彫られた溶岩は、鳥海山から10～9万年前のいずれかに流れ出た吹浦溶岩からなります。鳥海山は、標高2,236mもある東北を代表する高山ですが、日本有数の大きな火山で、最近の歴史時代に何度も噴火しています。その内、主なものを紹介します。まず、先の大震災のように東北地方を巨大な津波が襲った貞観地震（869年）の2年後、貞観13年（871年）に噴火したことが菅原道真などの編纂による三代実録に記されています。また、江戸時代の1800～1804年には、溶岩ドームを形成する噴火があり、現在の山頂部をつくる新山を形成しました。最近では、1974年2～5月に噴火し、山麓に火山灰を降らすとともに火山泥

流も流しました。歴史時代の噴火は、このように度々発生していますが、過去にはもっと大きな噴火を行っています。例えば、この羅漢様が彫られた溶岩は、地質図から読み取れる溶岩の広がりから、これら歴史記録に残る噴火より大きな噴火であったことがわかります。鳥海山は活発な火山であり、今後も活動を続ける可能性のある要注意火山です。

写真の露頭の十六羅漢は、海禅寺二十一代住職の寛海和尚が、海難で命を失った漁師諸霊の供養と海上安全を祈るため1864年（元治元年）に発願し、1868年（明治元年）に完成したものと伝えられています。堅い溶岩に彫られ、完成から100年少しの時間しかたっていないが、日本海の荒波をかぶるためか、もう不明瞭になっているところもあります。

文献

- 伴 雅雄・林信太郎・高岡宣雄（2001）東北日本弧、鳥海火山の K-Ar 年代一連続的に活動した 3 個の成層火山－。火山, 46, 317-333.
- 林信太郎（1984）鳥海火山の地質。岩鉱, 79, 249-265.
- 中野 俊・土谷信之（1992）鳥海山及び吹浦地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 138p.



5万分の1地質図「鳥海山及び吹浦」(中野・土屋, 1992)の一部に加筆。II b1が吹浦溶岩。II a2, 4, 6, II b3, 10, III a1などは、鳥海火山の溶岩・火砕流などの噴出物。sdは、砂丘堆積物。